

ポリバレント

2022・2・9 重枝 一郎

以前の職員会議で、「メンター制度」について話した。新任等（メンティー）に対し教科内で一人メンターを決め、相談役となってもらうやり方である。私が、入学式でも話した「ひとりにもなれる ひとつにもなれる」という言葉がある。「ひとりにもなれる」というのは「自分を磨くのは自分」という意味であり、主体性を求めていることである。また、「ひとつにもなれる」というのは「人は人によって磨かれる」「人はチームによって磨かれる」という意味であり、このメンター制度はこのことに当たる。

時代の流れや環境の変化もあり、一人でPCに向かう作業が増えたり、業務の合理化により業務の役割分担が増えたりしている。その結果、人とのコミュニケーションの必要性も低下している。この流れだけでいくと職場は静まり返るだけである。しかし、意識と行動を少し変えてみることで、職場の雰囲気は変えることができる。シンプルに言うと「集団」を「チーム」にするということである。

私もサッカーを指導していた時「人が集まるだけでは寄せ集めの集団で、チームではない」とよく言っていた。職場でも同じ部署でいくら机を並べていてもそれは「集団」でしかない。まずはお互いメンバーの顔を見て、マインドを確かめ合い、協力し助け合う意識と行動ができて、初めて「チーム」になる。これが「ひとつにもなれる」ということだと思う。また、「チーム」は強力な人材育成システムになり得る。

「チーム」や「メンター」の役割として、技術や知識を教えることも大事であるが、それ以前に重要なのは「マインドセット」の部分である。つまり、ポジティブなマインドになるような場にするということである。

話は少しそれるが、私は「方向性を示してほしい」と言われることや言うことがあまり好きではない。それは、重点を1点に集中させない教育が可能性を広げることと、先生方の多様性を保障したいという理由がある。それでも要求されれば何かをコンセンサスを得る努力はする。しかし、「バランスよくすべてやる」というのが本質になる。だからあえて「方向感をつくる」という言葉で年度当初に話した。ただ、絶対にすべての職員が逸脱してはならないと思うのは「マインド」の部分だと思う。「この学院を多くの市民に行きたい学校と言ってもらえるようみんなで力を合わせる」という「マインド」である。誰もが、当事者意識をもち、創造性を発揮していくチームになりたい。

生徒に「自分の強みを生かせ」という話をしたことがある。誰にも負けないという圧倒的な強みでなくても「そこそこ」でいいから2つくらいの強みを組み合わせることで自分らしさは十分つくれるという話である。私たち教師もそれでいい。というかそれがいい。プロサッカーの世界でいうところの「ポリバレント（一人の選手がいくつかのポジションをこなせる）」という感じである。チームのメンバーがそれぞれ「ポリバレント」になる。先生方にはそれを望みたい。セクト主義を打破し、理解し合える関係づくりにもなる。

サッカーの試合では交代枠がある。誰かが交代したらチーム戦術が崩れることがある。現代サッカーでは、「ポリバレント」な選手を中心にするチームが多い。そういうチームはチーム自体が崩れない。よく考えると私たちの日常には交代枠はない。つまり「ポリバレント」になることが必要になる。「ポリバレント」な能力の向上のためには、校務分掌、生徒指導、教科指導・・・すべてにおいて助け合っていく。失敗しようがその「マインド」をもつことが大切になる。